第41回 ぴあフィルムフェスティバル

PFF
PIA FILM FESTIVAL

第41回 PFF PIA FILM FESTIVAL 公式カタログ2019

元カノと寄りを戻したい…！ 愛と執着の30日間

A

『アボカドの固さ』

2019年/カラー/96分

9/ 7 [土]11:00～
9/13 [金]16:00～

推薦文

前原瑞樹という役者が実際に生きている今現在の東京の街と、架空のキャラクターである前原さんが生きる物語世界が、同じ強度で重なり合ってスクリーンに現れるところがこの映画の魅力です。セリフや行動の1つひとつが本作の「前原瑞樹」に立体感を与えていてどこまでもリアルだけれど、それはあくまで映画的なリアリティ。だから、劇中の前原さんは本当に気持ち悪いのだけれど、それを演じる彼を好きになってしまうのだと思います。現実の役者を元に物語を築き上げた監督の演出力と観察眼、そして被写体に対する誠実さに魅了されました。

上條葉月 映画館スタッフ・字幕制作者

監督・脚本・編集：城 真也
脚本：山口慎太郎
撮影：新藤早代
照明：山岸 元
製作：井上 遼
出演：前原瑞樹、多賀麻美、長谷川洋子、並木愛枝、小野寺ずる

物語

5年間付き合った恋人に別れを告げられるも、どうにかやり直したい前原。言動一つひとつがとてもリアルで、この町のどこかに生きているような主人公の、未練も恥も隠さぬ怪演が見どころ。空回りする復縁作戦の行方は……？

監督 城 真也

じょう・まさや／1993年生まれ、東京都出身。早稲田大学入学後、友人と映画制作を始め、同校の映像制作実習の授業で制作した『さようなら、ごくろうさん』(17年)がPFFアワードに入選。また並行して映画美学校に通い始める。現在は、テレビ番組制作会社で働いている。

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか？

前作にも出演してくれた前原くんと、「ぜひもういちど今度は主演で」となりまして、企画から一緒に考えました。当時前原くんは失恋したばかりで、会うたびに失恋にまつわるエピソードを聞かせてくれました。そのディテールが面白かったので「もう、それ撮りたいね」と盛り上がり、彼の実体験を元にした脚本をつくりました。人間は失恋を経験すると自分こそが悲劇の主人公だと思いたがるようです。その滑稽なさまを、冷たく突き放して見つめる映画になりました。前原くん本人が監督していたらもう少し優しい映画になったと思います。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

高校1年生の頃、1時間近く**阿部 薫がサックスを吹き続けるだけ、という内容のCD**を聴いて、こんなのアリかよと感銘をうけました。善悪、貴賤、右翼左翼、自他、美醜、そういったものから解放された音楽というか。圧倒的な「わからなさ」に衝撃をうけました。根が真面目なので、大胆不敵な表現に憧れます。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

ジャック・ベッケル、モーリス・ピアラ、成瀬巳喜男、青山真治の映画は、たぶん全部好きです（全ての作品を観ているわけではないけれど）。すべての要素が物語に奉仕するのでなく、描きこみすぎたゆえにディテールが不自然にふくらんでしまったような、紋切り型でない人間が登場する映画が好きです。

雨の日も家に居場所がない。2つの孤独はどこへ？

H

『雨のやむとき』

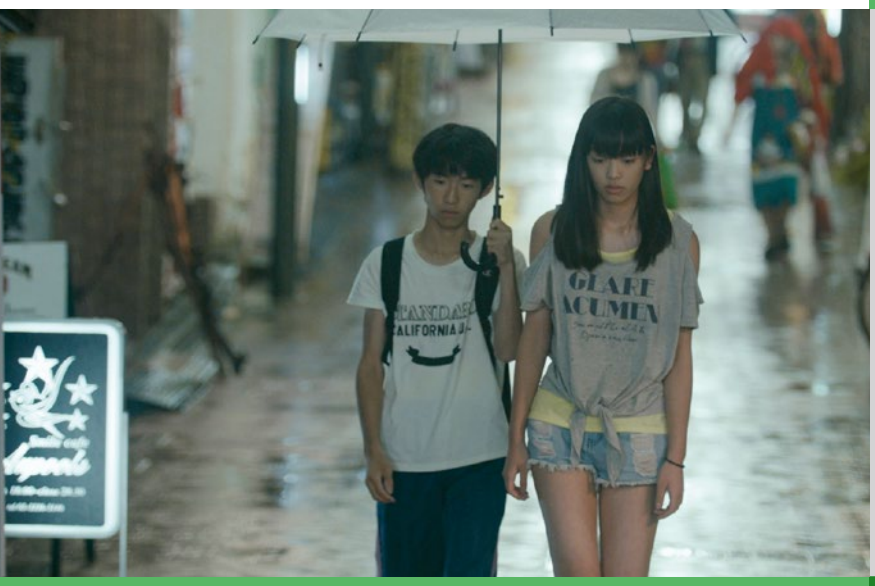
2019年/カラー/28分

9/11［水］16:00～
9/14［土］11:00～

推薦文

青少年が事件に巻き込まれたとき、青少年保護の観点から、あるいは最悪の場合、彼らが既にこの世に存在しないために、なぜ彼らが事件の被害者（時には加害者）にならなければならなかったのか、彼らの声を直接聞くことが叶わない場合が多い。大人は事件の衝撃に、ただ動揺するか、報道を介して知る事件前の彼らの断片的な印象を繋ぎ合わせて頼りない想像力にすがる他ない。では、私たちは無力なのだろうか。本作は、一人の人間の、対象に肉薄しようとする力は、そうして生み出された表現は、映画は、無力ではないことを身をもって示す。

木村奈緒 フリーライター



監督・脚本・編集：山口優衣
撮影：阿部太郎
録音：山口大雅
チーフ助監督：八木真琴
出演：滝田 匠、狩野ゆま、大澤由理、向井彩恵、松田実優莉

物語

それぞれに家庭の問題を抱える中学生の里佳子と航汰。家庭にも町にも居場所がないふたりは友達になり、河川敷という居場所を見つけるが……。大人の世界に振り回される孤独な子どもたちの感情に、丁寧に寄り添った作品。

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか？

大学1年の夏、とある男女二人が犠牲となった殺人事件の報道に釘付けになりました。被害者は中学生。残虐な事件性を訴えるマスコミの声の裏、中学生の男女二人が夜中に出歩き、家庭や友人関係からの小さな逃避行を行っていたことに、様々な疑問や違和感、共感が浮かんできました。「彼らは周囲をどう感じ、何を想って日々を過ごしたのか」悶々と膨らんだ想いと妄想に、気付けば筆を執っていました。暗中模索の殴り書きから3年の時を経て、なんとか形にすることができた作品です。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

アダム・デヴィッドソン監督の『The Lunch Date』という短編作品をはじめて見たとき、自分の中に潜在的に眠る先入観を見透かされているような気分になり、とても衝撃を受けました。自分の目線で見えている世界が全てじゃない。そう考えさせられた作品でした。また10分という短編で、明るい雰囲気を残しつつ、しっかりと社会風刺を描写し表現できる監督の手腕を心から尊敬しました。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

普段、あまり監督を意識せず作品を観てしまうのですが、明るい雰囲気の中社会風刺を含んでいる作品が好きで、『**河童のクゥと夏休み**』や映画『**クレヨンしんちゃん**』**シリーズ**の一部などの監督を手掛ける**原 恵一監督**の作品は全て好きです。扱う題材も毎回素晴らしく、見る年齢によって感じ方の変わる内容、家族の描写、アニメの中でもリアルで繊細な表現を忘れず、どこか懐かしさと匂いを感じる世界観が好きです。

監督 山口優衣

やまぐち・ゆい／1996年生まれ、千葉県出身。中学の頃から映像制作を始め、日本大学芸術学部に入学後、本格的に映画をつくり始める。現在は地元の写真館でカメラマンとして働きながら、自主制作やシナリオコンクールに向けて脚本を書いている。

まだ見ぬ観客はどこにいる？ 遥か宇宙にも！

D

『おばけ』

2019年/カラー/64分

9/10［火］12:30～
9/14［土］17:45～

推薦文

自主映画の可能性は「映画」という言葉の中身を個人の側から書き換えていくことにある。僕はそんな映画の登場をPFFの審査を通して待ち望んでいたのかもしれない。『おばけ』が正にそうだった。セルフドキュメンタリー、フィクション、メイキング、オーディオコメンタリー等々の妙味が混ざり合う本作は、それぞれの手法を強調する映画ではない。中尾広道監督が自分にとっての映画を探求し続けた結果が『おばけ』だ。こんな映画は見たことがない。こんな感動も初めてだ。映画の「永遠の輝き」を発明している。かつてないロマンチックな革命。

小原 治 映画館スタッフ

監督・脚本・撮影・編集・録音：中尾広道
音楽：TRIOLA、波多野敦子、松田圭輔
監督助手：高橋秀和、山下大樹
出演：中尾広道、中尾朔太郎、中尾み空

物語

一人で自主映画をつくり続ける監督と、彼を見守るはるか宇宙の星たち。誰も知らないささやかな映画制作の過程は大きな宇宙へとつながってゆく。手づくりの宇宙にときめき、映画への愛に胸が熱くなるロマンチックな作品。

監督 中尾広道

なかお・ひろみち／1979年生まれ、大阪府出身。友人の撮影を手伝ったことをきっかけに、自分でも映画を撮り始める。可能な限り、自分一人の力でつくるスタイルで作品制作を続けている。『船』(15年)、『風船』(17年)に続き、3度目のPFFアワード入選。

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか？

自身の映画制作過程で「別の映画が生まれる可能性」を感じたから。僕の映画制作は、カメラを持ってウロウロする所から始まる。特にあてもなく、街中や自然で面白いと感じた現象や風景を撮りためていく。役者やスタッフはいないし脚本すらない。映画をつくるというよりは映画を探す行為だ。あまりにも非効率で曖昧で滑稽で、我ながら呆れてしまうが、即興性が高く自由なのはいい。そんなこんなを俯瞰で撮ってみたら愉快な気がした。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

およそ30年前、**ザ・ブルーハーツ**との出会い。理屈抜きでカッコいい強烈なロックと、会ったこともないのに僕のことを全て知っていて背中を押してくれるような歌詞に心をぶち抜かれて、今もそのまま、ひらきっぱなし。とりわけ**ヒロトとマーシー**の存在は強烈で、今もなお彼らのロックに打ちのめされ続けている。自分の世界が広がるほど世界を知らなかった頃だけど、はっきりと世界の存在を気づかせてくれた。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

「**ウディ・アレン**」「**フランソワ・トリュフォー**」。映画に救われた者たちが、映画をつくることにより、その溢れでる映画愛と憧憬を一途に映画に注ぎ込む姿に心を打たれた。時には私小説のように赤裸々な心情を綴った作品群は、とてもまっすぐひねくれていて、それがまた映画としての魅力を豊富にしている。愛と情熱、純粋さ、いたずら心、ひたむきさ、ユーモア、みずみずしさ、すべてひっくるめて大好き。

バイクは走る。俺を乗せて。いつかと同じように

『OLD DAYS』

2019年/カラー/54分

9/10［火］16:00～
9/15［日］11:45～

推薦文

盗んだバイクで走り出す30代の夜！ かつては暴走族の一員であった男たちの1日をありきたりなバイオレンス描写に頼ることなく、真っ直ぐ描く54分がひたすらカッコイイ。一歩間違えれば、男臭くダサくなりそうなジャンルを圧倒的なリアリティーと無駄がないカットを積み重ね、奇跡的なバランスで、ギラギラしたロードムービーに昇華させている。理容院、パトカー、ハチマキ、エンディング曲、そして登場する男たちの顔・顔・顔…、暴走族という日本独自のカルチャーを世界中の人々に伝承したくなるほど、監督の愛と本気に震える事必至！

原 武史 レンタルビデオ店スタッフ

監督・脚本：末松暢茂
プロデューサー：山本 高、袴田 光
アソシエイトプロデューサー：佐藤理人
撮影：中嶋淳志
出演：髙野春樹、小田哲也、奥津裕也、管 勇毅、中村 有

物語

久しぶりに再会したかつての暴走族仲間。死んでしまった仲間のバイクで、あの日のように路上へ飛び出す！ 過ぎてしまった時間と変わらない友情。若者じゃないけど、紛れもない青春映画！ リアルな暴走描写も見どころ。

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか？

今しかできないことを正直に表現したいと思い、今だからこそ描ける「友人」をテーマにしました。様々な作品がありますが、あえて流行や新しいアイデアを取り入れるのではなく何処か懐かしさを感じる直球な作品にしたいと考えました。本作は短編映画を合わせて3作品目の監督作品となります。過去2作品、自分の視点から見る日本ならではの世界を取り入れてきました。本作でも「暴走族」という日本特有のカルチャーを扱っています。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

幼少期に祖父母が大阪にいて、よく万博公園に連れて行ってもらいました。万博公園にある**岡本太郎さんの手掛けた「太陽の塔」**には大変衝撃を受けたことを今でも鮮明に覚えています。こどもだった私は、物凄く巨大で今にも動きだしそうな太陽の塔が生きているように見え、話しかけたりもしていました。10代20代、現在でも大阪に行く時は時間があれば必ず見に行っています。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

アレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ監督です。初めて役者として映画に出演させていただいた作品が、アレハンドロ監督の『バベル』という作品でした。アレハンドロ監督は、オーディション・撮影中と終始作品に対する情熱が凄まじかったです。人間力も素晴らしく、人としても映画監督としても自分の人生に大きな影響を与えてくれました。そんな監督が手掛けてきた様々な作品が大好きです。

監督 末松暢茂

すえまつ・のぶしげ／1983年生まれ、東京都出身。俳優としてキャリアをスタートし、映画、舞台、MVなどに多数出演。ディレクターだった父親の影響で、24歳から監督として映画制作を始める。監督作に『TORE』（12年）、『ハルとロウ』（15年）がある。

新婚旅行と死をレンズに刻む。私と家族の24分日記

B

『温泉旅行記（霧島・黒川・嬉野）』

2019年/カラー/24分

9/ 7［土］18:00～
9/12［木］12:30～

推薦文

祖母が亡くなった。楽しみにしていた結婚式を待たずして。当たり前のように目にしていたあの笑顔をもう見ることはない。つまり「見る」とは、目に映るものがそこに「在る」ことの証。そして「撮る」とはそれを強く抱きしめること。だから監督は《目》を研ぎ澄まし、かけがえのない風景を切り取る。新婚旅行の宿を。その彩り豊かな夕飯を。浴衣姿の妻の口元を。ミルクロードを覆う濃霧を。廃れゆくものを。夜の黒川温泉に浮かぶ横顔を。徹底した客観写生が描き出す24分間の記録は、今まさに生きている愛の息遣いそのものである。

杉浦真衣 書店員

監督・脚本・撮影・編集・録音：佐藤奏太
音楽：吉井僚宏
出演：佐藤奏太、佐藤一紀、佐藤 幸、渡邊 諒

物語

監督自身がカメラを持ち、自らの新婚旅行を記録した日記映画。道程、旅館の食事、訪れた観光名所が淡々とした映像とモノローグで語られる。にじみ出る亡き祖母への想いと妻への愛に、これほど心動かされる不思議。

監督 佐藤奏太

さとう・そうた／1991年生まれ、新潟県出身。東京造形大学に入学後、映画制作にのめり込む。妻との新婚旅行を記録した本作では、撮影・編集・監督まで全てを担当した。現在は、レンタル放送機器を扱う会社に勤務している。

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか？

去年の「第40回PFFアワード」で、大学の同期で友人の山本の『小さな声で囁いて』を観に行き、刺激を受けたからです（会期中、2回観に行きました。2回目は私の妻も誘って2人で観ました）。もう一つは、劇中でも言及していますが、私の結婚式のちょうど3カ月前に、1番それを楽しみにしていた祖母が、脳梗塞で急逝してしまったことです。どこにぶつけたらいいのか分からない感情や、将来への希望や不安。それらを映画にしようと思ったからです。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

２年に1度催される「**山形国際ドキュメンタリー映画祭**」に、初めて足を運んだときは大きな衝撃を受けました。その後、3回再訪しました。インターナショナルコンペディションの内容も素晴らしいのですが、アジア千波万波というプログラムで上映される作品は、私の中の映画っていうものの概念を破壊してくれて、毎度予期しなかった収穫があり、映画ってこんなにも自由だし、もっと豊かであったことに気付かされます。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

佐藤 真監督。シリアスな題材をテーマにしていても、独特な軽さと切り口で、それを感じさせない演出。身構えて観てしまっている私たちが、拍子抜けしてしまうような、日常の些細な瞬間や表情が、その人にしかない輝きを持っているような気がします。私の通っていた大学の図書館に、佐藤 真監督のDVDが置いてあったので、通いつめて何度も何度も、繰り返し観ました。特に、『SELF AND OTHERS』がお気に入りです。

この瞬間に生まれた、私たちの音楽を届けるために

E

『きえてたまるか』

2019年/カラー/29分

9/11［水］12:30～
9/15［日］18:15～

推薦文

「いいじゃん楽しいし」「元気出してこ！」。同作はそんな直球弾で、鬱屈とした気分に風穴を開けてゆく。体や言葉が抑圧されることなくのびのびしているという、当たり前であるべきことが当たり前になされたとき、こんなにも画面から肯定感が溢れ出すのだとほころんだ。スーパーボールみたいに予測不可能な台詞や登場人物たちの生き生きとした表情も素晴らしい。終わりの予感を孕みながらも緩やかに持続する「あの日々」「あの感じ」を軽やかに再現しながら「きえてたまるか」と吠えて走り出す清水監督の思いが、確かに目の前をかすめた。

井戸沼紀美 上映イベント企画者

監督・脚本・撮影・編集：清水啓吾
脚本・撮影・録音：宇治田 峻
撮影・録音：北浦光記
録音：宇治田 優
出演：石川雅子、長野紀深香、
武井 the Skywalker、清水啓吾

物語

偶然手にした自主制作のCD、そこには誰も知らないつくり手の物語がある。身近な人たちと好きな音楽をつくる楽しさと、誰かに認められたい気持ち。何のためにつくるのか？ ものづくりの楽しさが詰まった愛おしい青春映画。

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか？

漠然と映画を撮りたいという気持ちを抱いていたが、何を撮るべきなのか全く分からなかった。一方で後輩の音楽制作を手伝った経験があり、その音楽を劇中に使いたいと思っていた。悩んだ挙げ句、その音楽をつくり上げた過程をそのまま再現して、思い出として残す意味も込めて、本作を制作することにした。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

大学4年生の夏の終わり。人生や自分のことについて色々と悩んでいたときに、骨董服屋の店主から映画『**裸のランチ**』を勧められて観た。そのあたりから何かが狂い始めた。他には高校生のとき夏休みに見た『**打ち上げ花火、下から見るか？ 横から見るか？**』や、もっとさかのぼると中学生のとき怪しい違法アップロードのサイトで『**新世紀エヴァンゲリオン**』を観たあたりからなにかぼくの人生はおかしかったかもしれない。他には小学生のころ狂ったように聞いていたORANGE RANGEなど。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

庵野秀明：作品が作品にとどまっていない。スクリーンとの境界を超えて観客に接触しようとしてくる感じ。**橋口亮輔**：会話が心地良い。美しい数式に則ったかのようなカット割、画角。ほかには、**小津安二郎**、**白石晃士**（コワすぎシリーズを一夜で見切ってしまったくらいハマっていた。前作を白石監督にほめてもらって自信がつき、『きえてたまるか』の制作に繋がった）など。

監督 清水啓吾

しみず・けいご／1995年生まれ、島根県出身。大阪大学在学中の18年、金子由里奈監督が主催した「自撮り映画祭」に応募するために、はじめて『乳母車の匂い』を制作。金子監督との出会いをきっかけに、田村将章監督『そんなこと考えるの馬鹿』にも出演。

銭湯って不思議だ！ 子どもの目が見たワンダーランド

A

『くじらの湯』

2019年/カラー/7分

9/ 7［土］11:00～
9/13［金］16:00～

推薦文

アニメーションという、無の状態から絵をつなぎ時間をつくり上げていく表現の中で、本作は、ガラスの上に一枚一枚描かれた絵が、湯気が立ち込め日常の延長線上にあるオアシスとして登場する銭湯とうまく調和し、銭湯を通して未だ知らぬ母を見る事になる主人公の子どもの心理ともリンクする。ダイナミックで不思議な行動をとる母親含む女性集団は妖しげだが生き生きとして見え、他者との境界が消え入り交じる裸の姿はどこかコミカルだ。日本と韓国にルーツを持つ監督が幼い頃の経験を通して作品化した本作は、どこか懐かしく、未知の世界を広げてくれる。

佐藤美代 アニメーション作家

監督：キヤマミズキ
録音：加賀田直子

物語

母親に連れられ銭湯へ行く子どもの体験を、色鮮やかに描いた短編アニメーション。扉を開ければ湯気の向こうに広がる非日常的で奇妙な世界。近所の銭湯も、子どもの頃にはこんな魔法の世界のように見えていたのかもしれない。

監督 キヤマミズキ

きやま・みずき／1992年生まれ、大阪府出身。映画祭で、同世代の作家の短編アニメーションに衝撃を受け、映像制作を始める。監督作に『ふたつめ』(15年)、『かえりみち』(18年)。本作は、東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻の修了制作作品。

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか？

本作は私が生まれ育った大阪のとある下町をモデルに、在日韓国人である母と共に過ごした、自らの幼少期の経験をもとに描いています。母を日本人だと思い込んでいた幼少期、風呂場での彼女の振る舞いが他の女性たちと何か違うということが、よく知らない母の本質の姿を垣間見るきっかけでした。そんな自らの経験を半ドキュメンタリー的に作品に落とし込んで、自身の生い立ちと向き合いたいと思いました。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

19歳の頃に金沢21世紀美術館の企画展で**ラファエル・ロサノ=ヘメルさんの『パルス・ルーム』**という大型インタラクティブ作品を体感した経験です。無数の電球が規則的に吊るされて明滅していて、その一つひとつが訪れる鑑賞者の心拍と連動しているというものです。電球の数に限りがあるので、新しい心拍が増えるほど古い心拍は消えていきます。当たり前の世界の姿が形を変えてここにあると実感した時、芸術の偉大さを感じました。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

監督自体を追いかけることはあんまりないのですが好きな作品は色々あって、その中でも**スタンリー・キューブリック監督『2001年宇宙の旅』**と**アルフォンソ・キュアロン監督『ゼロ・グラビティ』**、**山村浩二監督『頭山』**はずっと好きです。映画を通してこの世の真実をみつけたいという監督の好奇心にワクワクします。また自分自身の創作の原点に連れ戻してくれるので、何度も観ています。

瑞々しい言葉で紡ぐ、新感覚の「植物になりたい」友情譚

D

『散歩する植物』

2019年/カラー/30分

9/10［火］12:30～
9/14［土］17:45～

推薦文

「人間力高めてこう」と奏子のバイトの同僚は言う。人間は生きている限り上を目指さなければならないらしい。そんな人間に疲れ、地中に深く根を張る植物への憧れを強めていく奏子は、同じく植物に特別な思いを抱く少年、航と過ごす時間が大切なものになっていく。奏子はいつも独特の言い回しで周囲と会話する。だから意味としてすんなり伝わらずに思わぬ誤解を生むこともあるが、そこに人間だけに許された可笑しみが宿る。ラストは一見ぶっ飛んでいるようにも見えるが、違和感に正面から向き合った結果だろう。切実さがユーモアを呼ぶ奏子の姿が、とても愛おしい。

安川有果 映画監督

監督：金子由里奈
撮影：大西辰弥
録音：中山 渉
プロデューサー：加藤桃子
造形：瓜生遼太郎
出演：立脇実季、井手尊飛、ミワチヒロ、計良元宏、山田愛与

物語

“植物になりたい”奏子は、ある日植物園で航と出会う。やがて航には根っこが生えてきて……ふたりの奇妙な友情は言葉によって築かれる人間関係を超えてゆく。印象的な言葉と映像で不思議な世界に惹き込まれる作品。

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか?

映画には興味があったので、新歓期に映画部の部室に遊びにいきました。当時の部長に「映画は誰でも撮れるよ」と言われ、いや無理ですよ……と気後れしてた時に、映画部の先輩の作品を鑑賞しました。良くも悪くも「学生映画らしい学生映画」に人生で初めて出会い衝撃を受けました。映画制作への敷居が一気に低くなったのがきっかけです。その先輩は理由もなくテレビを投げ、理由もなく食器用洗剤で綺麗にテレビを洗っていました。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

水戸芸術館で開催された「**内藤礼──明るい地上には、あなたの姿が見える**」です。自然光のみの空間にひそやかに揺れる透明のビーズ。それを触れたい瞳で見つめている女性。その奥にも展示室が連なり、沢山の人が歩いている。それがぜんぶ嬉しくて泣いてしまいました。内藤さんの作品は鑑賞者がとても美しい。ガラスに反射する私もまた、見られているという確信があり、こんなにも存在を肯定された場所をずっと覚えていたいです。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

語れるほど詳しくないので並べます。概念の創造者、**山戸結希監督**、**山田尚子監督**。映画発明家的映画監督、**草野なつか監督**、**三宅 唱監督**。ちょい怖ファンタジーの名人、**小栗康平監督**、**アピチャッポン監督**。時間空間の秀/天才、**ホセ・ルイス・ゲリン監督**、**片渕須直監督**。アゲ師・**月川翔監督**。ずっと大好き**白石晃士監督**。圧倒的な映画の息遣いの**田村将章監督**、優しいんだろうな、死後お茶したいなと思うのは**エリック・ロメール監督**。とかとか。

監督 金子由里奈

かねこ・ゆりな／1995年生まれ、東京都出身。立命館大学入学後、映画部に入部し、映画制作を始める。『おいしいコーヒーの作り方』(16年)、『食べる虫』(17年)。18年には、山戸結希プロデュースのオムニバス作品『21世紀の女の子』に公募枠から選出された。

自転車に魂が宿る！ シュールで奇妙な夜が訪れた

『自転車は秋の底』

2019年/カラー/34分

9/ 8 [日] 10:30～
9/12 [木] 16:00～

推薦文

ベルを鳴らして光を放って一網打尽に駆け抜ける！ ブレーキの効かない“暴走”自転車から逃げ切れる？ いや、それとも、ついてこれますか？ 真っ暗闇をいきなり照らす光は、時に激しく眩しすぎ、暴力性を孕みます。劇中の宵の空気が、仄暗い映画館にも共犯的に漏れ出して、すっかり闇夜に包まれた空間で、突如、スクリーンいっぱいに映し出されるストロボライトは、観客の瞳までをも襲うのです。自転車の、狂気と凶器の二面性。街はどんなに暗くとも、自転車の夢は夜ひらく。ジュブナイルホラーの要素漂う戦慄に心を奪われる、ミッドナイトの挑戦状！

長井 龍 レコード会社社員

監督・脚本・撮影・編集・録音：逵 真平
操演他：佐貫公哉
音楽他：下平航士朗
車輛他：羽鳥 稜
照明他：三浦康隆
出演：下平航士朗、阿部 遥、逵 真平

物語

突然、無人の自転車に追われる男。そこから離れた場所で、奇妙な物体に遭遇する女。魂の宿った自転車の描き方がなんとも絶妙！ これはホラー？ 青春映画？ 自転車と男女の不思議な物語が、観客の想像力を刺激する。

監督 逵 真平

つじ・しんぺい／1991年生まれ、東京都出身。早稲田大学在学時、映画研究会で自主制作を始める。卒業後は、フリーで映像編集の仕事をしている。監督作に『今日にさよならエイリアン』(10年)、『安子の春はもうすぐそこ』(13年)など。

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか？

中学の時から乗っていた自転車が壊れて、家に置いたままでどうしても捨てることができなかった。自転車は人ではないが、「足」のように使っていた物も時間が経てばいなくなってしまうことにどうしても違和感がある。物は人とは違うが一緒にいられるわけもなく、体もそのうち忘れて離れていく。そしたら時間が経った時、残る体は一人ですらないな。と思いつつ映画を撮っていたが、一人きりの時間ばかりの映画になったかもしれない。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

15歳の頃、**大林宣彦監督『転校生 さよならあなた』**を見たとき。ここと全く関係ない中学生の物語に、確かに知らない誰かがいて自分の知らないところがあるように見えた。スクリーン上の人物でなくつくり手ですらもなく、その全ての中に居る感じだった。ピアノが弾かれてから激流のように映像が流れてくる時、見えない誰かと会った。劇場を出たあと、今日未だ知らない人に出会えたから、また生きていく中で絶対に会うだろうなと帰った。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

まず**ポン・ジュノ**。『**ほえる犬は噛まない**』などではなにかの目的で走っていたのに、結局同じところをずっと回っていた気になる。彼らはヘラヘラ笑っていたけど、最後には異物だったものが、拡げられた自我の枠組みに混ざってくるイメージ。次に**大島 渚**。『**少年**』『**東京戦争戦後秘話**』では誰もが真面目な顔をしているが、お互いへの被害や加害という関係性への疑いを提示する半ば、ふいに人が外へ出たとき見える道とか光が本当のように現れてくる。

世界一タフな25歳！ 普通でスーパーなヒロイン現わる！

B

『スーパーミキンコリニスタ』

2019年/カラー/101分

9/ 7［土］18:00～
9/12［木］12:30～

推薦文

承認欲求と自己顕示欲にまみれたこの世界を、丸ごと背負いこんでしまったようなスーパーミキンコリニスタに疲れちゃう人だってもしかするといるかもしれない。それでも「そんなことで疲れてんじゃないよ」と言わんばかりに、それを演じている俳優の身体そのものが、役柄や物語、映画そのものを乗り越えていくような生の輝きをいつも放っている。そして、猫がかわいいと思えることの瞬間を描いた映画でもある。スーパーミキンコリニスタは生きていくことを微塵も諦めていない現代のヒーローだと思う。

五十嵐耕平 映画監督

監督・脚本・編集：草場尚也
撮影・編集：勝木 駿
録音：加藤陽子
音楽：吉村駿也
出演：高山璃子、松川 星、芝崎唯奈、今村輝大、金時むすこ

物語

役者志望のミキンコリニスタは、情熱はあるけど先の見えないエキストラ俳優。どこにでもいそう、だけどやっぱり誰にも似てない彼女は間違いなく“スーパー”ミキンコリニスタ！ その一挙手一投足に誰もが虜になる！

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか？

どうしても映画がつくりたくて仕方がない！ っていう時は決まってシナリオの筆が進まなくて。飲んだら書けるかもしれない、っていうのは甘えでしかなくて。そんな時に体内から溢れ出てきた自分の唯一の作家性が『スーパーミキンコリニスタ』でした。その名の人物には、モデルの女の子が存在していて。その女の子が、「ぴあフィルムフェスティバル」の為に上京するという噂を耳にしていて。そう、この映画は正真正銘の「100%片思い映画」なのです。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

例えば、90年代、カート・コバーンの死が全世界の若者に大きな影響を与えたように、2000年代、**志村正彦**の死が私にとっての始まりでした。「普通の大人になりたくなかったから始めた音楽があって、だけど普通の大人になっていく人たちが妙に羨ましく思える」、あの頃追いかけていた言葉が、最近ますます胸に迫ってくる。いつか、四季をモチーフにした映画が撮りたいと、あの頃からずっと。29歳になっても、超えてもずっと。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

私にとって**小津安二郎**は、日本映画界のスーパースターです。日本にもこんなにすごい監督がいたという事実がただただ嬉しくて。世界的に評価されているという記事を見る度に自分のことのように喜んだり。例えば、老夫婦に一番親切なのが実の子供ではなく戦死した息子の嫁さんで、そんな彼女は己を責めて恥じているなんて、すごく胸が痛くて、だけど愛おしくて。いつだってヒューマニズムを感じさせる小津映画が好きでたまりません。

監督 草場尚也

くさば・なおや／1991年生まれ、長崎県出身。大学在学時、大分シネマ5に通い、映画の魅力に取り憑かれ、湯布院映画祭のスタッフを経て、映画美学校に入学。制作会社に勤務し、連続ドラマや商業映画の現場で活躍する傍ら、本作を完成させる。

認知症の透明人間の姿を通じ、人々のすれ違いを描く野心作

H

『そんなこと考えるの馬鹿』

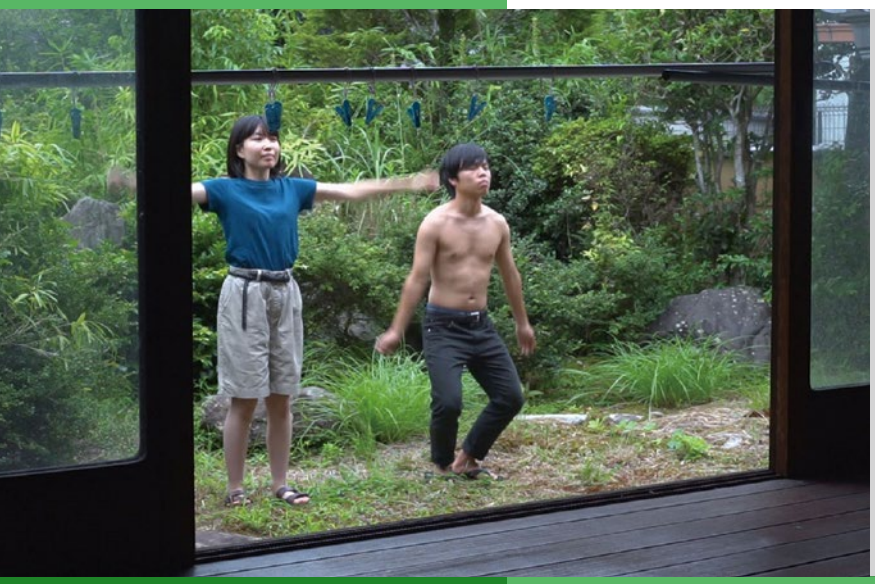
2019年/カラー/45分

9/11 [水] 16:00～
9/14 [土] 11:00～

推薦文

人間が生きている。その事実の広がりが実際に画面に映し出される。夏子と秋生がそうめんをすするだけで、存在に弾力が生まれる。空気を震わせる声の中に、その人がいる。これだけでも惚れ惚れするのに、同じ画面に更なる存在が大胆に仕掛けられる。認知症のおばあちゃんは透明人間だ。面喰った。田村将章監督は透明=不在という安直な記号で片付けない。この映画の透明は、鑑賞者の視線を別のステージに接続させて物語全体を引き上げていく「プロセス」だ。僕は頭が混乱しそうになったけど、見終わった時には胸が一杯になっていた。

小原 治 映画館スタッフ



監督・脚本・編集：田村将章
プロデューサー：小林李緒
撮影：金堂公亮
録音：中山 渉
助監督：阿部真佑
出演：遠塚比奈（劇団ケッペキ）、清水啓吾、金子由里奈

物語

大好きないとこのアキオが住む家へ遊びにきた夏子。アキオにしか見えなかった透明人間のおばあちゃんの姿が見えた時、2人は同じ世界を共有できるのか？ いま自分が見ている世界の常識や当たり前が揺らぐ一作！

監督 田村将章

たむら・まさあき／1995年生まれ、滋賀県出身。立命館大学の映画部への入部がきっかけで映画制作を開始。映画部では劇映画を、ゼミではドキュメンタリーを制作。監督作に『砂の食卓』(15年)、『不条理シリーズ(いじめ/ザ・インタビュー)』(15年)。

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか？

従来の透明人間像とは全く異なるものをつくろうというのが始まりです。その結果、女性・老人・認知症の透明人間という案が思い浮かびました。そのあと脚本を書き進めていく段階になって、透明人間自体が主人公なのではなく、その周囲の人々にスポットを当てる方向にシフトしました。僕がこの映画で試みたことは、透明人間を目撃した男女の決定的なすれ違いの物語とその結末です。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

中学時代に観た『**時計じかけのオレンジ**』の鮮烈さは忘れがたいです。しかし、それにも増して衝撃を受けたのは、この映画を観て衝撃を受けない人もまた存在するということです。これは当然なのですが、当時の僕にとっては信じられませんでした。かといって、何度も観たわけではありません。おそらく2回です。2回目を観たとき「こんな映画だったか?」と妙に冷めた感想を抱いてしまったのが、別の意味で衝撃的だったからです。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

映画を観ているとき、ヒトとモノの境目が曖昧になる瞬間に出くわすことがあります。そのたびにゾクゾクするような緊張が全身に走ります。それはここに挙げる監督たちの作品で多く起こります。こういった芸術を生み出す監督たちを尊敬してやみません。**ミヒャエル・ハネケ、ロベール・ブレッソン、アッバス・キアロスタミ、ジョン・カサヴェテス、増村保造、神代辰巳、相米慎二、黒沢 清、ルイ&オーギュスト・リュミエール**……。

コラージュで駆け抜ける、8分間の日常詰め合わせ

『東京少女』

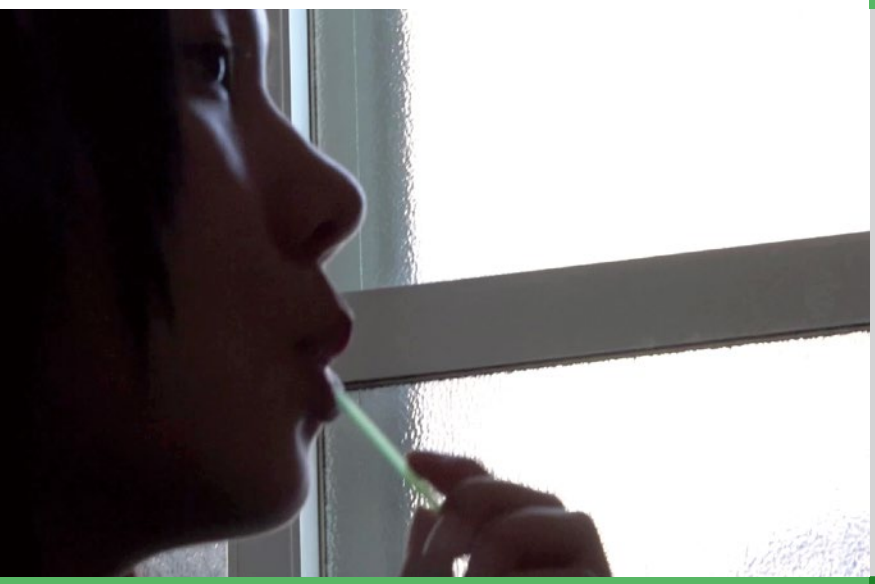
2019年/カラー/8分

9/ 8［日］10:30～
9/12［木］16:00～

推薦文

男子があっという間に男の子になってしまうように、平成がたった1日で昭和に戻っちゃったみたいに、10分はいかない一瞬だけど、この映画を観ている間はまるで女の子を体験したかのような特別を感じてしまう。だからきっと緊張する。退屈もすると思う。髪の毛を乾かすドライヤーの五月蠅くて熱い風を浴びているような感覚になると思う。全ては終わってからがはじまり。今この時を詰め込んだタイムカプセルが投げられてきた時、好奇心の強さが試される。自分の中に微妙な違和感を抱くあなたに、その皮膚感覚に本作が届くことを信じている。

尾形友利亜 映像製作会社社員



監督・脚本・撮影・編集：橋本根大
録音：飯島奈々
制作：鈴木彩音
整音：上戸幸輝
出演：柊 まこ

物語

2019年1月、もうすぐ1つの時代が終わる。初めて元号の変わり目を迎える“わたし”が眼差す、“わたし”と切っても切り離せない“時代”の断片を集めた短編。猛スピードのモノローグと映像で駆け抜ける8分間！

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか？

この映画をつくったきっかけは東京を描きたいと思ったことです。僕は東京が好きです。どんな人も受け入れてしまう部分が。それは包容力というよりは、どちらかというと好きにしたらいいよという冷たさに近いと思います。そんな東京を描くために、女性に独り言を言わせ、そして川のように常に流れる映像に載せることで自分の東京をより現すことができると思い、このような作風にしました。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

自分は高3の頃から日記をつけており、そのきっかけとなったのは**島田紳介がネタ帳に「一億円ノート」と付けていたこと**です。ノートを買ったときは恐らく高くても300円とかだったと思いますが、そこに文字を書くことで価値が上がっていくことに刺激を受け、感化され、今でも日記を続けています。自分の人生はつまらなく、その日のことを書けないので基本妄想や作品の構想を書いており、現在では2400ページになりました。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

宮崎 駿監督を尊敬しています。彼のつくる作品は本当に発想力もキャラクターも構成力もなにもかも僕の心を掴んできます。『**千と千尋の神隠し**』なんて訳が分からないのに訳が分かるというよく分からない感想が出てしまう。一つひとつに愛があり、この映画にとっての神様である感じがたまらなく好きです。もし地球を神様がつくったとしたら、こういう人がつくったのだろうなと思わされるほど本当に凄い人だと思っています。

監督 橋本根大

はしもと・ねびろ／1994年生まれ、群馬県出身。大学在学中に映画の表現の自由さに気付き、カメラを持つ。卒業後に専門学校東京ビジュアルアーツに入学。主な作品に『それはまるで人間のように』(19年)、『ハイトエラ』(19年)など。

抱かれるはずのクマのぬいぐるみが抱く、幸せと痛み

『何度でも忘れよう』

2019年/カラー/10分

9/ 8 [日]14:15～
9/13 [金]12:30～

推薦文

もしわたしの身体の内側が白くてふわふわだったら、背景がすべて黒で消されて自分の家族だけが浮かび上がるような環境に生きていたら、世界の見え方は確実に変わっていた。これはクマのぬいぐるみの主観の話。ビー玉のような丸い目を通して見て感じている自分と母のことを、可哀想だと判断するのはいつも僕じゃない。母の悲鳴に詰まる愛、柔らかな抱擁と優しいウソ。すべてを信じたくなったそのとき、灰色と黒色ばかりで生彩を失っていた世界が驚くほど蘇り始めた。たぶんわたしはやっと君の目で世界を見ることができたのかもしれない。

尾形友利亜 映像製作会社社員

監督：しばたたかひろ
音楽：澤田怜奈
音響：鶴岡紗衣、伊藤琴音
出演：青山ゆり華、中村 平

物語

不安定なママと2人で森に暮らす、クマのぬいぐるみ。たとえ傷つけられても、何度でも一緒に食事をし、腕の中に戻る。断片的に描かれるクマの生活から、幸せや痛み、様々な感覚を想像させる詩的なアニメーション。

監督 しばたたかひろ

しばた・たかひろ／1992年生まれ、愛知県出身。もともとイラストレーションを勉強していたが、大学の教授に勧められ、映画制作を始める。東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻の修了作品として本作を制作。監督作に『くだもの』(18年)。

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか？

映画制作の動機のひとつに「子供の主張が軽視される問題」が挙げられる。親からの暴力や学校でのいじめなど、自分では解決のできない事実を大人に主張するが、そんな訴えがまるでなかったかのように扱われる事例をマスメディアを通して多く見聞きした。私は子供たちの切なる願いが当たり前に尊重され、叶えられていくことを願っている。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

私は10代をろくに学校にも通わず、ひたすら自室に引きこもって過ごした。周囲と壊滅的に価値観が合わず孤立したのが主な理由で、その時そっと私に寄り添ってくれたのが芸術であり、芸術は私にとって唯一の取り柄であり生き甲斐だ。大学進学のタイミングで芸術の世界を私の居場所として選択し、腹を括った時、過去の自分と決別できたような気がした。私は**芸術そのもの**から救われている。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

私は**今敏監督**を尊敬し、また多大なる影響を受けている。ストーリーを受動的に追うだけでは到底浸ることのできない画面内の世界には、無数のメタファーが散りばめられ、私たちの能動性を掻き立てる。これは映画を鑑賞する上での醍醐味とも言えるだろう。このような映画の構成は、私のアニメーションにも大いに変化を与えた。

このお人好し、不快だ！ 寄生を許すか、戦うか

E

『泥濘（ぬかる）む』

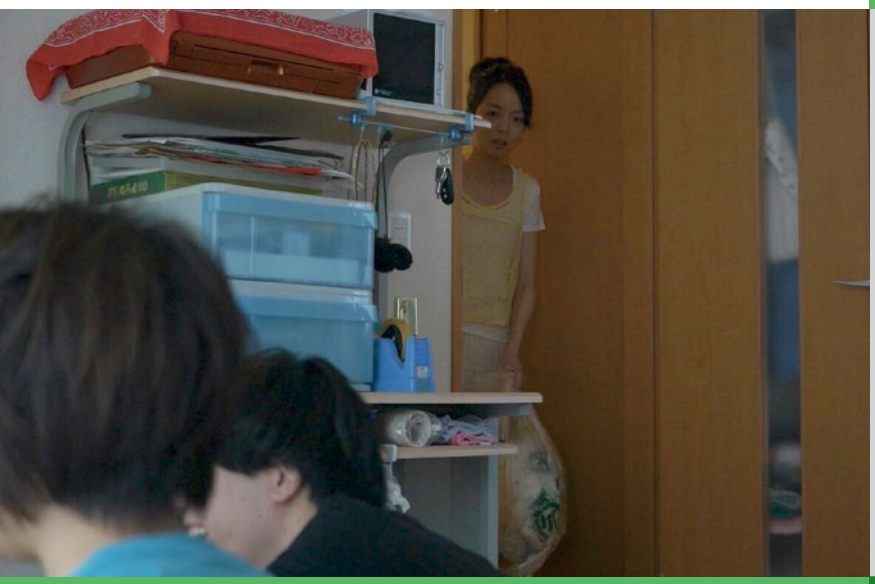
2019年/カラー/25分

9/11［水］12:30～
9/15［日］18:15～

推薦文

しどろもどろな女性の家に転がり込んだ、とどろきうごめく数匹の人間たち。どんどん蝕まれていくこの家で繰り広げられる争いに、終止符を打つのは誰でしょう。狂おしいほどに歯痒く悶える悪夢の日々がはじまった！因果律に逆らうが如く、徹底的にやってくる理不尽な喧騒。不条理なのかと思いきや、リビングに寝そべる人間たちから溢れ出る《絶対にこの世に存在していると思わせてくれる異物感》が、虚構と現実の綱渡りを成功させている。まるで性善説と性悪説がシェアハウスをしているかのような、究極のリアリティーショーをご堪能あれ！

長井 龍 レコード会社社員



監督・編集・出演：加藤紗希
脚本：豊島晴香
撮影：河本洋介
録音・整音：田中大地
出演：豊島晴香、神田朱未、髙羽 快、釜口恵太、湯川紋子、加藤ゆに

物語

姉が家に戻ると、妹が拾ってきた若い男女が住み着いていた。お人好しの妹は追い出せず、事態はエスカレート。予想もつかない展開へ……。自らも俳優である監督が役者たちの魅力を引き出した、心をざわつかせる悲喜劇。

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか？

映画美学校アクターズコースに半年間通っているうちに、映画のことが知りたくて自分でつくってみたいと思うようになりました。アクターズコースは映画のつくり方を学ぶというよりは俳優として演技を考える場所でしたが、この場でよき仲間を得たことが映画制作を実行に移す後押しとなりました。同期である豊島さんに声を掛けて、自分たちが俳優としてやってみたいことに挑み、出演俳優たちの魅力を最大限に生かす作品を目指してつくりました。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

むずかしい質問です。映画を観ることや撮影に参加することによって、無理に良い人でいないでよいのかもと思えるようになり少し生きやすくなった気がしています。ふと思い浮かんだのは、代々木競技場第二体育館で観た**イッセイミヤケさん主催の「青森大学男子新体操部」の公演**です。身体をめいっぱいに使ったパフォーマンスに自分のからだのなかが不思議な感覚で充満した記憶があります。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

杉田協士さん。『**ひかりの歌**』が大好きです。人生で初めてパンフレットにサインをいただいた監督でもあります。ワークショップに参加したことがあるのですが毎回持ち帰るものが多すぎるので、その後数日ふわふわします。
竹内里紗さん。彼女がつくったほとんどの作品を拝見しました。出会いは映画美学校だったのですが、考え方やものの見方においてとても信頼しています。大好きです。

監督 加藤紗希

かとう・さき／1989年生まれ、愛知県出身。18年、映画美学校のアクターズコースを修了。演じるだけではなく自分でもつくってみたいと同期に声を掛けて本作を制作。振付師・俳優として活動する傍ら、制作ユニット「点と」を立ち上げ、映像作品の制作も続けている。

ゾンビと逃亡犯。異色すぎる二人の美しいロードムービー

『ビューティフル、グッバイ』

2019年/カラー/113分

9/ 8 [日] 14:15～
9/13 [金] 12:30～

推薦文

ゾンビと逃亡犯を乗せた車は西へと向かう。明日があるという保証などない。別れの時は刻一刻と近づいているに違いない。日を追うごとに濃縮されていく一分、そして一秒。死の匂いの強まるほどにきらめきを増す生の輝き。「サヨナラだけが人生だ」と言ったのは誰だったか。出会ったその瞬間から、誰しもが別れへの旅を始める。例外などない。その現実を突きつけられて、胸がきしむ。愛しき人を愛することの奇跡を知る。だからどうかヒマワリ畑よ、彼らのために今、狂い咲け。二人の最初で最後の夏の終わりに。

杉浦真衣 書店員

監督・脚本：今村瑛一
撮影：春木康輔
編集：上島尚子
録音：五十嵐猛吏
音楽：大村知也
出演：竹林佑介、葉 媚、中島弘輝

物語

人を刺した男と、恋人にゾンビとして蘇らされた女。追っ手から逃れるための逃避行で、心を通わせてゆくふたり…旅はどこで終わるのか。忘れられない大切な瞬間の数々が、美しい映像とともに心に焼きつく。

監督 今村瑛一

いまむら・えいいち／1987年生まれ、愛知県出身。大学卒業後、日活芸術学院に入学し、映画制作を始める。卒業後、フリーの助監督を経て、現在は映像制作の仕事をしている。その他の監督作に『かべづたいのこ』(15年)、『宴の宵がさめるまで』(17年)。

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか?

助監督を数年やって、今は映像制作の仕事をしながら自主映画をつくって、で、少しは賞などをもらって。でも、あまり先も見えず、前に進んでいる感じもしない。そう易々と映画監督にはなれません。だから、映画監督になるきっかけを掴むため、長編映画をつくろうと思いました。迷いや悩み、苦境もたくさんありましたが、それも含めて、自分の思っていることや感じていることを吐き出しながら、この映画に向かいました。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

地元の大学で建築を学んでいた頃のこと。**豊田市美術館の意匠設計**を見学に行った際、何の気なしにその時やっていた企画展を見て衝撃を受けた。篠原有司男の巨大壁画がそそり立っていた。2階まである吹き抜けの壁を、3面に渡って描き連ねた絵の迫力に圧倒され、言葉が出なかった。重ねられた原色の破壊力、規格外のサイズ、すべてに凄まじい熱量が込められていて、常識なんて取っ払っちまえと言われているような出会いだった。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

北野 武監督の"少なく描いて、多くを語る"ような手法には少なからず影響を受けています。折に触れ、映画の教科書のように観させてもらっています。**スティーブン・スピルバーグ監督**は、田舎のテレビでしか映画を観られない少年からしたらヒーローでした。映画の持つ面白さに触れるきっかけになった監督です。その出会いは古く、僕がまだ幼稚園の頃、「ジョーズから逃げるんだ」と海水浴場を逃げ出したそうです。

「どんな傷も癒やす源泉」を求め、失恋中の男は旅に出た

『フォルナーリャの聖泉』

2019年/カラー/26分

9/11［水］12:30～
9/15［日］18:15～

推薦文

失恋中の日本人監督自ら出演・ナレーション（ポルトガル語／英語）で送る。彼と同い年のキャンピングカー・通称“ロバちゃん”＆インド人の友人クリシェと行く“どんな傷も癒す”源泉探し。旅先の人々や友人の話を聞いて、時には一句詠んだり……。「どこ出身ですか?」と聞かれ、番地まで答えてしまうポルトガルの老人ルイシの声やシワは彼の過ごしてきた時間を物語る。伝説にでもなんでも、誰かにたぶらかされたフリをして家を飛び出したって、求めれば世界は何らか応えてくれる。監督自らそれを体現し、どこか作為的なこの旅は示してくれる。

渡邉一孝 映画プロデューサー

監督・脚本・編集・録音：桑山 篤
撮影：Krish Makhija、Martha Appelt、Thiago Carvalhaes
整音：Elsa Ferreira
出演：O Burrito the Ford Transit 2.4、Antonio Feliciano、Luis Manuel、Antonio Manuel、Vitor Ratos

物語

失恋の傷を癒すため、ポルトガルの伝説であるフォルナーリャの聖泉へ！ 道中で出会う人々から引き出される恋愛や人生、映画についての魅力的なエピソードたち。自らに向き合いながら外の世界へ飛び出すロードムービー。

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか?

好きなロードムービーをドキュメンタリーで挑戦してみたく。世の中が便利になり、ものごとを分かった気になることで、他者と出会う「旅」というものが難しくなってきているのではないかという危機感のようなものも浮かび上がってきて。そんな折、家賃の高騰するリスボンでキャンピングカーと移動しながら暮らし、玄関を開けると異世界という経験の意味を掘り下げていったら、運転を誤って溝に落ちていました。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

昔、表象する言葉の限界ばかり感じていた頃に**町田 康さんの詩や文学**に出会い、世界を切り裂いたり耕したり孕ませたりする言葉の側面に希望を見出しました。それは身体感覚として「こそばゆ」く、深いところで笑いにつながっている。相互承認とアルゴリズムで自我が強化されまくる昨今、超大切な仕事だと思います。映像にもこのような二面性があるし、自分も情報ではなく経験を媒介するような映画のことばづくりに関わりたい。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

ヴィターリー・カネフスキー：世の不条理、その中で生きる人々の生命力、民族を超えた懐かしさを極めて荒々しい美へと融合させる演出。**ヤン・シュヴァンクマイエル**：素材や手法を横断し、触覚を通じて観る者の自我を揺さぶるその技術と執念。**チャールズ・チャップリン**：時代と文化を超えて人を笑わせ、優しくするユーモアとペーソスの普遍性。三者とも違った形で原点にある真摯な怒りを人類への贈与に昇華させており、唯々脱帽。

監督 桑山 篤

くわやま・あつし／1986年生まれ、福岡県出身。大学卒業後、青年海外協力隊員として派遣されたキルギスで、孤児院などの子供たちと映画制作を行う。17年からヨーロッパ周縁を巡回するシネキャラバンを実施。監督作に『オリヴィア』(16年)、『また次階!』(17年)など。

家族は大切、でもモヤっとする。高校生の繊細な感情

『めぐみ』

9/10［火］16:00～
9/15［日］11:45～

2019年/カラー/34分

推薦文

俯瞰して安易に対立構造をつくり出すのではなく、めぐみを通してそれぞれが抱える複雑さに寄り添い、人物を浮かび上がらせようとするつくり手の姿勢に誠実さを感じる。母の父への悪口、暗いニュース、父の諦め、将来への不安。そのすべてがめぐみの心を抉っていくが、ある時めぐみは諦めることを諦める。物語らしい物語や、わかりやすい結末はない。だが食事の背後で流れる「17歳の少年が父親を殺害した」ニュースが決して他人事ではないことが、宙ぶらりんな状況を生き抜こうとするめぐみの殺気に満ちた表情から充分すぎるくらいに伝わってくる。

安川有果 映画監督

監督・脚本・編集：道岡円香
撮影：夏井俊吾、出野達郎
録音：松本拓也、古家未葵
出演：村田奈津樹、宇田川さや香、ますいたかみち、美馬一英、稲葉悠介

物語

美大を目指す高校生めぐみ。母とその再婚相手と暮らし、時々は上京した父にも会う。自分が"めぐまれている"と頭で分かってもぬぐえない、少女の複雑な気持ちを丁寧に描いた作品。彼女の感情が爆発する瞬間は必見！

監督 道岡円香

みちおか・まどか／1998年生まれ、広島県出身。早稲田大学人間科学部に入学後、「映像制作実習」の授業で企画が選ばれ、映画制作を始める。本作では、自身の高校時代の感情を思い出しながら脚本を執筆した。

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか？

つくろうと思ってつくった映画ではありません。この作品は大学の授業で撮ったのですが、私は映像制作、特に監督という役職に興味があってその授業に参加しました。しかし、そこで監督をするには企画書が選ばれる必要がありました。そこで、どういった企画書なら選ばれるか？ 先生達が行う他の企画書への講評を参考にしつつ、自分の企画書の講評の際に感じた「苛立ち」をテーマにすることに決めて、こうした作品が出来上がりました。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

映画に限らず文学・音楽・漫画など、あらゆる表現媒体の作品に救われた経験があります。その中で、文学だと高校時代に読んだ**夏目漱石の「こころ」**が一番かもしれません。国語の宿題で嫌々読んだのですが、いざ振り返るとあの時読んでいなかったら今頃自分がどうなっていたか想像出来ません。一生に一度でいいから、こころの底から"先生"と呼べる存在に出逢いたいものです。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

マーティン・スコセッシ監督。映画をつくりながら監督自身も苦悩し、自分を如実に映画に反映してしまうという、作家の宿命めいたものを最も感じられる監督だからです。血の気の多い環境で育ちながら聖職者を目指していた過去を持ち、最終的に映画の道に進むといった、監督の抱える矛盾が作品にも滲み出ているのが好きです。映画の仕事はゲームだと言い切り、映画をつくる際に絶対的な自分の理由を必要とする姿勢にも感銘を受けました。

日常の景色が変わっていく、「旅をしない」旅の行方

『ワンダラー』

2019年/カラー/31分

9/ 8 [日] 10:30～
9/12 [木] 16:00～

推薦文

「いまデンマークにいる」という1つの嘘で世界はなんにも変わらないけど、咲子の「世界の見え方」は大きく変わる。わたしたちそれぞれが、各々の信じる安全な嘘を日々生きているとするならば、咲子はそこにもうひとつの嘘を持ちこんで、本当に信じたいものを掘り起こそうとする。終着点は分からないままに彼女はこの嘘に賭けていて、切実だけど楽しそう。気分ひとつで、デンマークでもスウェーデンでも日本でも、どこにだっていられるし、どこにもいなくてもいい。ただスクリーンだけが彼女の居場所を肯定していることが気持ちいい。

新谷和輝 ラテンアメリカ映画研究者

監督・脚本・編集：小林瑛美
撮影：洲崎 翔、真島宇一
録音：安宅充夫、髙橋裕美
出演：榎本彩乃、小嶋貴子、釜口恵太

物語

恋人から、出張でデンマーク旅行に行けないと言われた咲子。一人で家に残ったが、偶然出会った旅行者を泊めることに。家にいながら旅行を演じるうち、不思議と周りの世界は変わってゆく。さまよい始めた彼女はどこへ？

Director's Voice

Q1 なぜこの作品をつくろうと思ったのでしょうか？

どんな映画をつくろうか考えていたときに、スーツケースを持ち電車で空港に向かっていた女性が、乗り換えのために一度電車を降り駅のホームのベンチに座ったらなぜか立つのが面倒になり電車を見送ってしまうという光景が浮かんだ。この人には興味が持てると思い、この後どうなったか、どんな人なのか考えていってこの作品ができた。遠方に行ったとき、ふとどこに行っても同じだなと思うことがあり、その感覚にも影響された。

Q2 文化・芸術から衝撃を受けたり救われたりした経験を教えてください

大学生の時に**チェーホフの「犬を連れた奥さん」**を読んだ。海辺の保養地の色合いや湿気に近くにいる相手の温度が混ざりあうような感じ。ラストで、主人公の男がふと鏡に写った自分を見て老けたなと思う。こんな自分を好きだと言う相手へ愛しさがこみあげ、また、不憫だと思う。互いが非常に愛しく思いあっていることがわかっても、本当の困難はまだ始まったばかりなのだと思いいたる。これが人間のかなしみなんだと思った。

Q3 好きな映画監督と、その理由を教えてください

ギョーム・ブラック。人物と場所の存在の仕方とそれを見る監督の距離感。作品がうつしだす現実の冷たさ。台詞がすごい。**ケリー・ライヒャルト**。相手の思いを想像せざるをえない彼女たちのことがものすごくわかると思った。私たちは逃れようがなく歴史の中で生きていて、この人たちはアメリカに生きている。**オタール・イオセリアーニ**。善悪とかもう関係なく、でも達観でもなく、人を見ていてすごい。

監督 小林瑛美

こばやし・えみ／1992年生まれ、東京都出身。東京大学行動文化学科在学中に、映画を撮りたいと思い、友人に協力してもらいながら自主制作を始める。卒業後に、映画美学校のフィクションコースに入学。初等科を修了し、現在は高等科に在籍中。

[PFFアワード2019] 最終審査員

PFF Award Competition 2019 Juries

最終審査員は5名。映画監督を含むクリエーターで構成され、毎年違った顔ぶれです。
賞は数時間にわたる討議の末に決定し、表彰式で発表されます。

※敬称略。五十音順

斎藤　工　俳優・映画監督　Takumi SAITOH

1981年生まれ、東京都出身。01年に俳優デビュー。主な出演作に、日仏シンガポール合作『家族のレシピ』(主演)、『麻雀放浪記2020』(主演) など。今後の公開予定作に『MANRIKI』(企画、プロデュース、主演/19年)、『ヲタクに恋は難しい』『糸』(20年)、『シン・ウルトラマン』(主演/21年) がある。齊藤 工名義でFILMMAKERとしても活躍し、初長編監督作『blank13』(18年)では国内外の映画祭で8冠を獲得。『Life in a box』『COMPLY+-ANCE』など監督としての待機作多数。劇場体験が難しい地域の子供たちに映画を届ける移動映画館「cinēma bird」を主催するなど活動は多岐にわたる。

白石和彌　映画監督　Kazuya SHIRAISHI

1974年生まれ、北海道出身。95年、中村幻児監督主催の映像塾に参加。以降、若松孝二監督に師事し、フリーの演出部として活動。10年、初の長編映画監督作品『ロストパラダイス・イン・トーキョー』で注目を集め、続く『凶悪』(13年) は、13年度新藤兼人賞金賞ほか各映画賞を総嘗めにした。18年、『孤狼の血』が、日本アカデミー賞優秀賞最多12部門を受賞。主な作品に『日本で一番悪い奴ら』(16年)、『牝猫たち』『彼女がその名を知らない鳥たち』(17年)、『サニー/32』『止められるか、俺たちを』(18年)、『麻雀放浪記2020』『凪待ち』(19年) など。最新作『ひとよ』が11月8日から公開。

西川朝子　映画プロデューサー　Asako NISHIKAWA

1973年生まれ、東京都出身。慶應義塾大学在学時より他大学の自主映画制作に参加、無職・留学の時代を経て㈱テレビマンユニオンへ入社。『蛇イチゴ』『カクト』(03年)、『誰も知らない』(04年) で映画事業に従事。06年バンダイビジュアル㈱ (現・㈱バンダイナムコアーツ) 入社。主なプロデュース作品に『夢売るふたり』(12年)、『グッド・ストライプス』(15年)、『永い言い訳』(16年)、『素敵なダイナマイトスキャンダル』(18年)、『夜明け』『チア男子!!』(19年) など。実写映画と並行して『百日紅 ～Miss HOKUSAI～』(15年) 等アニメーション映画のプロデュースも手掛ける。

野村佐紀子　写真家　Sakiko NOMURA

1967年生まれ、山口県出身。九州産業大学芸術学部写真学科卒業後、92年より荒木経惟に師事。主な写真集に「裸ノ時間」(平凡社)、「夜間飛行」(リトルモア)、「黒闇」(Akio Nagasawa Publishing)、「TAMANO」(Libro Arte)、「Ango/sakiko」(bookshop M Co., Ltd.) など。17年、約100名の男性たちのヌードを主軸とした写真群を400ページで構成する写真集「愛について」(ASAMI OKADA PUBLISHING) を発表。8月23日公開の『火口のふたり』(荒井晴彦監督) では写真を担当し、原作を手がけた直木賞作家の白石一文との共著「あの頃の『火口のふたり』」(河出書房新社) が発売中。

山下敦弘　映画監督　Nobuhiro YAMASHITA

1976年生まれ、愛知県出身。大阪芸術大学の卒業制作『どんてん生活』(99年) で注目を浴び、初の本格商業映画『リンダ リンダ リンダ』(05年) が大ヒットを記録。続く『天然コケッコー』(07年) にて第32回報知映画賞・最優秀監督賞を最年少受賞。以後、『マイ・バック・ページ』(11年)、『苦役列車』(12年)、『もらとりあむタマ子』(13年)、『味園ユニバース』(15年)、『オーバー・フェンス』『ぼくのおじさん』(16年)、『ハード・コア』(18年) など。最新作はカラダカルピスの機能説明を映像化したwebムービー「idle time」。今の日本映画界において娯楽性と作家性とを兼ね備えた融通無碍な作風。

第41回ぴあフィルムフェスティバル タイムテーブル

PFF 検索

Time Table

Ⓖ…ゲスト来場予定。＊ゲスト敬称略
＊日ごとに上映開始時間が違いますので、ご注意ください。＊開場時間は、上映時間の15分前です。
＊やむを得ない事情により、プログラムおよび来場ゲストが予告なく変更になる場合もございます。ご了承ください。

上映がスタートすると、当日会場窓口のチケット販売は終了します。

9.7［土］	OZU	11:00～ PFFアワード2019『くじらの湯』『アボカドの固さ』 A	14:30～ 凄すぎる人たち〈カッコいい女編〉 日本初上映『おみおくり ～Sending Off～』 ゲスト:イアン・トーマス・アッシュ監督、今田かおる B	18:00～ PFFアワード2019『温泉旅行記(霧島・黒川・嬉野)』『スーパーミキンコリニスタ』 B
	小ホール		13:45～ PFFスペシャル講座「映画のコツ」『テラダモケイピクチャーズがついにスクリーンに!』 ゲスト:寺田尚樹 5	16:30～ 巨匠たちのファーストステップ Part4『息もできない』 ゲスト:ヤン・イクチュン監督 4
8［日］	OZU	10:30～ PFFアワード2019『自転車は秋の底』『東京少女』『ワンダラー』 F	14:15～ PFFアワード2019『何度でも忘れよう』『ビューティフル、グッバイ』 C	18:15～ ブラック&ブラック ～映画と音楽～『DOPE／ドープ!!』 ゲスト:DJ YANATAKE 3
	小ホール	11:15～ ブラック&ブラック ～映画と音楽～『私はあなたの ニグロではない』 3	13:30～ 追悼・吉武美知子プロデューサー『TOKYO!』 ゲスト:堀越謙三 7	17:00～ PFFスペシャル講座「映画のコツ」日本のゴダール? 伝説の8ミリ作家、中山太郎傑作選 ナビゲーター:松本圭二 5
9［月］		月曜 休館日		
10［火］	長瀬記念ホール OZU	12:30～ PFFアワード2019『散歩する植物』『おばけ』 D	16:00～ PFFアワード2019『めぐみ』『OLD DAYS』 G	19:00～ 凄すぎる人たち〈諦めない男編〉『恐怖の報酬【オリジナル完全版】』 ゲスト:岡村尚人、長谷川英行 4
11［水］		12:30～ PFFアワード2019『泥濘む』『フォルナーリャの聖泉』『きえてたまるか』 E	16:00～ PFFアワード2019『雨のやむとき』『そんなこと考えるの馬鹿』 H	19:00～ ブラック&ブラック ～映画と音楽～『真夏の夜のジャズ』 ゲスト:ピーター・バラカン 3
12［木］		12:30～ PFFアワード2019『温泉旅行記(霧島・黒川・嬉野)』『スーパーミキンコリニスタ』 B	16:00～ PFFアワード2019『自転車は秋の底』『東京少女』『ワンダラー』 F	19:00～ 巨匠たちのファーストステップ Part4『メランコリーの妙薬』 日本初上映 4
13［金］		12:30～ PFFアワード2019『何度でも忘れよう』『ビューティフル、グッバイ』 C	16:00～ PFFアワード2019『くじらの湯』『アボカドの固さ』 A	19:00～ 凄すぎる人たち〈諦めない男編〉『変態村』 2
14［土］		11:00～ PFFアワード2019『雨のやむとき』『そんなこと考えるの馬鹿』 H	13:30～ 劇場版 特別先行上映『ガンダム GのレコンギスタI』 ゲスト:富野由悠季総監督 G	17:45～ PFFアワード2019『散歩する植物』『おばけ』 D
	小ホール	12:00～ 凄すぎる人たち〈カッコいい女編〉『昔々ベイルートで』 2	14:30～ 巨匠たちのファーストステップ Part4『一瞬の夢』 4	17:00～ 追悼・吉武美知子プロデューサー『ダゲレオタイプの女』 ゲスト:黒沢 清監督 7
15［日］	OZU	11:45～ PFFアワード2019『めぐみ』『OLD DAYS』 G	14:30～ 巨匠たちのファーストステップ Part4『郵便配達は 二度ベルを鳴らす』 4	18:15～ PFFアワード2019『泥濘む』『フォルナーリャの聖泉』『きえてたまるか』 E
	小ホール	11:00～ 凄すぎる人たち〈カッコいい女編〉『シューティング・マフィア』 日本初上映 2	13:30～ PFFスペシャル講座「映画のコツ」原 恵一監督と橋口亮輔監督が映画の神髄を探るシリーズ「天才・木下恵介は知っている:その3」 ゲスト:原 恵一監督、橋口亮輔監督 聞き手:川尻将由監督 G	17:30～ 追悼・吉武美知子プロデューサー『ライオンは今夜死ぬ』 ゲスト:諏訪敦彦監督 7
16［月・祝］		月曜 休館日		
17［火］	長瀬記念ホール OZU	14:00～ 巨匠たちのファーストステップ Part4『死刑台のエレベーター』 4	16:30～ 巨匠たちのファーストステップ Part4『ローラ』 4	19:00～ 巨匠たちのファーストステップ Part4『フルートベール駅で』 4
18［水］		14:00～ 凄すぎる人たち〈カッコいい女編〉『昔々ベイルートで』 2	16:30～ 凄すぎる人たち〈カッコいい女編〉『シューティング・マフィア』 日本初上映 2	19:00～ 巨匠たちのファーストステップ Part4『ボーイ・ミーツ・ガール』 4
19［木］		13:30～ 凄すぎる人たち〈諦めない男編〉『東京裁判』※途中休憩あり 2		19:00～ 凄すぎる人たち〈諦めない男編〉『殺しが静かにやって来る』 2
20［金］			PFFアワード2019表彰式 ※チケットの発売はありません。	
21［土］		11:45～ 巨匠たちのファーストステップ Part4『メランコリーの妙薬』 日本初上映 4	14:15～ PFFアワード2019 受賞作品上映① (準グランプリ作品含む) G	17:45～ PFFアワード2019 受賞作品上映② (グランプリ作品含む) G
	小ホール	11:00～ カンヌ映画祭批評家週間って何? プログラム① 日本初上映 6	13:30～ カンヌ映画祭批評家週間って何? プログラム②＋ゲストトーク ゲスト:レオ・ソエサント 日本初上映 G 6	17:00～ カンヌ映画祭批評家週間って何?『典座 -TENZO-』 ゲスト:富田克也監督 特別先行上映 G 6